

特集・ベトナムのガイ人—客家系マイノリティの歴史・宗教・エスニシティー—

ヌン族の華人の祀る神

—中国・ベトナム・オーストラリアの実地調査から—

芹 澤 知 広*

**The Gods Worshipped by the Hoa Nung: An Exploration in China,
Vietnam, and Australia**

SERIZAWA Satohiro*

This paper reports the findings of field studies in China, Vietnam, and Australia into the gods worshiped by the Hoa Nung people. The Hoa Nung are a group of ethnic Chinese who migrated from southern China in the eighteenth and nineteenth centuries and settled in Hai Ninh province (the present Quang Ninh province), northern Vietnam. The settlement's central religious facility in Ha Coi (the present Quang Ha) was the temple of the Goddess of Mercy, Wu Guo Guan Yin Miao (Mieu Quan Am Ho Quoc). In 1954, when the communist government led by Ho Chi Minh occupied their autonomous region, the Hoa Nung undertook a massive migration from northern to southern Vietnam. During this migration, the temple gods also migrated to the south. In addition to many places in southern Vietnam, branches of worship were also established in Australia after the fall of Saigon in 1975. Politicians that have been important to the people in the borderland between China and Vietnam throughout history are included among the gods.

1. は じ め に

民族についての学術的な議論を行ううえで重要なのは、その民族カテゴリーが行政上の概念であるのか、学術上の概念であるのか、民俗上（当該社会での社会通念上）の概念であるのか、という区別に留意することであろう。本論の主な対象地域にあたる中国とベトナムの現政権は、それぞれ中華人民共和国とベトナム社会主義共和国であり、両国とも前世紀にソビエト連邦を範に成立した社会主義国家として、国民を国家が決定した民族カテゴリーに分類し、各民族に対応した民族政策を行っている。

* 奈良大学社会学部, Faculty of Social Studies, Nara University
2017年8月3日受付, 2017年10月30日受理

また、この両国の関係でとくに注目すべきは、中国とベトナムが国境を接し、古代から両国の領土にあたる場所で国境をこえる人々の交流が盛んに行われてきたにもかかわらず、1978 年から 79 年にかけての中越紛争では、その地が武力衝突の舞台となり、両国にまたがって居住する人々に対する政治上の重要性が過去にも増して高まったことであろう。中国の主要民族には「漢族」という民族カテゴリーが中国から与えられており、その民族集団に該当するベトナムの民族カテゴリーは「ホア (Hoa) 族」になる。また、ベトナムの主要民族「キン (Kinh) 族」という民族カテゴリーに該当する民族集団には、中国では「京族」という民族カテゴリーが用意されている。中国での京族とベトナムでのホア族は、双方の国家にとって行政上の管理に注意を要する民族集団であり続けている。

筆者がベトナム・ホーチミン (Hồ Chí Minh) 市での実地調査を始めた 1990 年代前半、ベトナム南部では、外国人にとって調査がむずかしい民族として、「ホア族」、「クメール (Khmer) 族」、「チャム (Chăm) 族」があげられていた。クメール族はカンボジアの主要民族であり、ベトナム南部の先住民である。またチャム族は、かつて中部に独立国を成したチャンパ王国の末裔であり、現在はイスラーム教徒になっている。外国との関係をもつ少数民族はベトナム国家にとって要注意であった。しかしホア族のなかには、ホーチミン市などの都市部に居住して商業に従事する人々が多数含まれ、1991 年にベトナムと中国の国交が正常化すると、ホーチミン市のホア族はベトナムの中国貿易を先導する役割を担うことになった。それは筆者のような外国人がホーチミン市でホア族の民族文化を調査するには追い風となった。

その後、筆者は、中国広西チワン族自治区の京族についての調査を実施した香港科技大学の張兆和博士に誘われて、1999 年から 2001 年にかけてホーチミン市のホア族の宗教施設の碑文を収集する共同調査 (日本の国際交流基金の助成) に参加した。しかし、その時には、ホーチミン市にも多く居住する「ヌン族の華人 (Hoa Nùng)」を、共同研究の研究対象である「ホア族」のなかに含めて調査することができなかった。当時、南部のホア族の調査をしているベトナム人共同研究者から聞いたところでは、ヌン族の華人も、ホア族であるから、ホア族として調査をしたいと政府に申請しているが、ベトナム南部に住むヌン族がもつ政治的な重要性から未だ許可が下りないということであった。筆者が「ヌン族の華人」というベトナム語の用語を知ったのはこの時が初めてである。つまり、ベトナムの行政用語には「ヌン族」と「ホア族」しかないが、そこにはうまくあてはまらない民族集団があり、それを指すための学術用語として「ヌン族の華人」という言葉がベトナムで使われている。本論では、その言葉を重要な民族カテゴリーとして使用する。そして以下では、便宜上「ホア族」を指して「華人」という語を用いることにしたい。

2000 年代初頭の当時、このヌン族の華人の民族文化について筆者は具体的なイメージをもっていなかった。しかし 1990 年代に香港のベトナム難民キャンプで暴動があった時に、ア

アメリカのヌン族のグループが、暴動を起こしたベトナム難民を支援していたことを香港の報道から知っていた。また香港の難民キャンプについての調査研究を読み、難民キャンプ内のヌン族のグループがキャンプ内に観音廟を建てたこと [Thomas 2000: 165]、難民キャンプのヌン族のなかに「ガイ語」という言葉を話す人々が含まれていること [Hutton 2000]、などに留意していた。このようにヌン族がアメリカ、さらには、かつてのベトナム共和国（南ベトナム）、フランスと関係をもつことから調査がむずかしいことは容易に想像できた。

2004年度から2007年度にかけての科学研究費の共同研究（代表者は東京外国語大学、三尾裕子教授）に参加して、再びホーチミン市で華人の調査を始めたころには、ベトナムの研究者もヌン族の華人についての調査ができるようになっていた [Trần 2008]。また、2010年度から2012年度にかけての科学研究費の共同研究（代表者は京都大学大学院、片岡樹准教授）では、ベトナム・ビントゥアン省のヌン族の華人の集住地区とオーストラリアのヌン族の華人の観音廟を訪問した。その間、ヌン族の華人について短い文章を2つ公開し、科学研究費の報告書に寄稿した [芹澤 2009, 2013, 2014]。

本稿は、2014年度から2016年度にかけての科学研究費の共同研究（代表者は筆者）のなかで中国広西チワン族自治区等を訪問した時に収集した情報を加えて、ヌン族の華人が祀る神格について筆者の現時点で知るところを報告したものである。そのことを通じて「ヌン族の華人」という民族カテゴリーを、その集団に該当する人々自身の語りや表象から具体的に検討し、現在のベトナムの行政上の民族カテゴリーである「ガイ (Ngái)」と国際的な学術上のカテゴリーである「客家 (Hakka)」についての新たな知見を提供することを目的としている。

伊藤正子が指摘するように、ベトナム北部から南部へ移動したヌン族の華人（伊藤の用語では「ハイニンの『ヌン』」）についての研究は蓄積が足りない [伊藤 2009: 133]。また近年、ベトナムの客家について報告した河合洋尚と呉雲霞は、ヌン族の華人（河合・呉の用語では「ンガイ人」）についても言及しているが、その民族性について、ヌン族の華人が特徴的に祀る神々と結び付けては論じていない [河合・呉 2014a, 2014b]。以下で明らかにするように、「ヌン族の華人」という民族カテゴリーの成り立ちにとって、「護国観音廟」という宗教施設はきわめて重要であり、この護国観音廟や他のヌン族の華人の神廟に祀られる神々は、ヌン族の華人に固有の神格を含んでおり、彼らの民族性と深く結び付いている。

2. 中越国境地域沿岸部の文化的共通性

中越国境地域沿岸部とは、現在の中国広西チワン族自治区のなかの旧広東省地域と、現在のベトナム・クアンニン (Quảng Ninh) 省にあたる地域のことを指している。この中越国境地域沿岸部の中国側は、もともと広西省に含まれていたが、明代以降に広東省になり、中華人民共和国になってから現在の広西チワン族自治区へ編入されている。この中越国境地域沿岸部の

中国側は「欽廉」と略称され、ヌン族の華人が考える祖籍地にあたる。欽廉とは、欽州と廉州のことである。

隋の時代の 598 年に「欽江県」が設置され、そこに州の役所が置かれて州名を「欽州」としたのが、「欽州」という地名の始まりになる〔龍・莫 1983: 101〕。この時の欽州は、今の防城、欽州、霊山を指していた〔龍・莫 1983: 102〕。そして唐の時代の 632 年、合浦県の東北部を含めた地域に「廉州」が設置された〔龍・莫 1983: 110〕。そして清の時代の 1887 年に欽州西部を「防城県」とした〔龍・莫 1983: 106〕。中華民国時代の 1925 年には「北海市」が成立するが、後に「北海鎮」になり、1951 年に再び「北海市」となった〔龍・莫 1983: 112〕。この歴史的な経緯をまとめると、欽州は現在の防城港市、東興市と欽州市（霊山を含む）にあたる。また廉州は現在の北海市（合浦を含む）のことである。

中国の学者は、言語と民俗（風俗習慣）の観点から、広西チワン族自治区の文化を地理的に区分している。そのなかで歴史地理学者の滕蘭花は、范玉春の提示した 4 区分を採用して表のかたちで紹介している。それによれば、「官話」（北京官話）を話す「桂北桂中官話文化区」、
「粵語」（広東語）を話す「桂東南粵語文化区」、
「湘語」（湖南方言）を話す「桂東北語文化区」、
「壮語」（チワン語）を話す「桂西南壮語文化区」の 4 つがある。本節で取り上げる中越国境地域沿岸部は「桂東南粵語文化区」に含まれ、その風俗習慣上の特徴として、婚礼は媒酌婚でビンロウを贈り物に使うこと、葬礼は二次葬で「孝歌」を歌うこと、食文化では「涼茶」を飲み、粥を食べ、甘い味を好むこと、祭日では、端午節にドラゴンボートレースが行われ、三月三日を祝うこと、演劇には「粵劇」、「師公劇」、「采茶劇」があることが指摘されている〔滕 2011: 255〕。¹⁾ なお、このなかで端午節のドラゴンボートレースと三月三日が祭日であることは他の 3 つの文化区とも共通している。三月三日はチワン族が墓参をする日であり、都市部の漢族では「玄帝」（「真武」）の誕生日の祭日になる〔塚田 2000: 92-93〕。

広西チワン族自治区の文化には広府人（広州を中心にした広東省珠江デルタの漢族）の移民の影響が大きく作用しており、広府人の移民が多い場所は、それだけ広府人の文化の影響が大きい。とくに明清時代には、広東省珠江デルタの人口が増大して西へ移動したほか、広府人の商人が凝集して広西で経済活動を行ない、「無東不成市」（広東なくして市場なし）、「無市不趨東」（市場なくして広東へ向かうことなし）、という構造が生まれた〔滕 2011: 264〕。

広府人商人が広西の市場を支配していたことが、広西の市場での共通語としての広東語を成立させたと考えられる。1920 年代から 30 年代にかけての中華民国政府の統計では、当時は

1) ビンロウが贈り物に使われることや、いったん埋葬した後洗骨をしてから再度埋葬する二次葬は、ベトナム北部のキン族にもあてはまる。「涼茶」とは体の熱を消すための葉草茶であるが、ベトナム北部のキン族の使用法は広府人（広州を中心にした地域の漢族）よりも客家人に近い〔芹澤 2015〕。「粵劇」は広東語を用いたチャイニーズ・オペラのこと、広府人の商人が広西の諸都市に進出し、同郷会館を設立するなかで、広西の諸都市に広まった。

広東省であった沿岸部を含まないが、当時の広西省のなかで、じつに 62.77 パーセントの住民が広東語を使用でき、19.15 パーセントの住民が客家語を使用できた [滕 2011: 264].

黄濱の研究によれば、清朝末期から中華民国期にかけて「無東不成市」の構造が最高度に達していたのが、今の広西チワン族自治区の沿岸部である。欽州市では、1784 年に広府人商人が「粵東会館」を建設し、1892 年に改修している。中華民国時代の欽州の商人は、広州、仏山、三水、南海、番禺、香港などから来て、商品も広州や仏山から欽州に運ばれてから西南地方の諸都市へと転送された。欽州市にある 25 の市場町（「墟鎮」）のうち 24 では広東語が共通語になっており、もう 1 つは広東語とチワン語の両方が共通語になっている。廉州の港湾都市、合浦は、19 世紀後半から主要な港としての地位を北海に譲るが、真珠と塩が有名なために多くの広府人商人がここで活動していた。合浦県の市場町 33 は、すべて広東語が共通語になっている。防城港市防城区では、清朝末期から中華民国期にかけて「広府人」（広州府出身の広東人）のいない市場は存在しないという状況で、今も 23 の市場町のすべてで広東語が共通語になっている [黄 2005: 153-154].

広西チワン族自治区において広東語は「白話」（バックワー）という。「白話」は「話し言葉」の意味で、香港でも広東語の意味で「白話」という語を使うことがあるが、広西の「白話」と香港・広州の「白話」は、同じ広東語でも発音や語彙、表現が異なる。たとえば、現在の香港の広東語では、「家に帰る」は「返屋企」（ファンオクケイ）というが、これが広西の広東語では、「回屋」（ウイオック）となる。中越国境地域沿岸部の重要地名の「欽州」は、香港・広州の広東語では「ヤムチャウ」と発音するが、広西の広東語では「ハムチャウ」と発音されている。筆者が 2005 年にホーチミン市でヌン族の華人にあった時に、その人たちは自分たちを「欽廉から来た」と自己紹介したが、広西の広東語で「ハムリム」と発音された「欽廉」の語を筆者はとっさにはわからず、「お前は欽州（ハムチャウ）も知らないのか」と言われたことがあった。

この広西の「白話」が、中越国境地域のベトナム側の市場においても共通語であったことを、筆者は 2014 年にベトナム・ランソン（Lang Son）省のランソン市の市場を訪れた時に実感した。市場に隣接した廟のなかの老年女性たちは「白話」を解した。

中越国境地域沿岸部の民俗のなかでは、とくに市場で売られている食品を取り上げて、中国とベトナムの双方に広範囲に分布することを指摘したい。ヌン族の華人の「ソウルフード」にあたるような食品に、「ソイエック」というものがある。これは、米粉が原料で白く寒天状に固められた主要部分に、ひき肉や、細かく切ったキノコ類（キクラゲなど）を煮た具がかかったものである。これに魚醤（ヌオクマム）のタレをかけて食べる（写真 1）。

「ソイエック」という語は広東語の言葉で、漢字で書くと「水糲」や「水乙」になる（糲は、偏が「米」で旁が「壹」から成り、おそらく「エック」の音に近い「壹」にもとづく当て字



写真 1 ソンマオの市場で売られているソイエック (2012 年 8 月 筆者撮影)

だと思われる)。中国広西チワン族自治区北海市の客家文化について紹介した書物では、ソイエックを次のように紹介している。

「北海の客家人は、七月十四日の中元節に水盖糰（あるいは盖糰ともいう）を作って食べる習慣がある。

『盖』とは、鍋のフタのことで、竹を編んで作った大きな鍋ブタを使うことを指している。

北海客家人は、『水盖糰』のことを、『水盖糰』や『糕』ともいう。白話と廉州話を話す地元の人たちは『水糰』という。広東省の湛江人は『簸箕炊』、広西中部の客家人は『九層糕』という。

名称だけではなく、作り方にも差異がある。白話人の『水糰』と湛江人の『簸箕炊』には具材がない。いっぽう客家人の『水盖糰』は具材が豊富である。最後の二層、三層、を蒸す時、タケノコ、豚肉、よく炒めた卵、キクラゲ、みじん切りにしたネギなどを具材に加える。地元の人たちは、これを『菜心』という。完成した『水盖糰』は、八層から十層くらいの量になっている。冷ました後、角があるような形に小さく切り、層を剥ぎながら食べる。滑らかでおいしい。」〔世界客属第24届懇親大会組委会他 2011: 131〕

この記述からは、主要な部分に何も具が入っておらず、上に具材が載っているだけのソイエックは、北海市では白話を話す人の食品で、客家人のものではないということがわかる。なお、チワン族は儀礼食に、もち米を使った食品を古くから多用するため〔塚田 2000: 33-34〕、ソイエックとそれに類した食品は漢族に特有のものである。

ベトナム語では、ソイエックに類した米粉の食品を、「バイン・ドゥック (Bánh dúc)」という。クアンニン省の地誌は、クアンニン省で食べられているバイン・ドゥックを次のように説明している。

「クエンニン省には、2種類のバイン・ドゥックがある。イエンフン、ドンチュなどの地区では、北部平野の各省のバイン・ドゥックに類似したバイン・ドゥックがある。陰暦の八月十五日、多くの家庭では、独自のバイン・ドゥックを調理する。たいていは、小さく刻んだ豚のバラ肉か、煮たココナツが混ざっている。東部の各県では、華人に由来するバイン・ドゥックがある。多くの場合、それをバイン・ドゥック・タウ（Bánh dúc Tàu）と呼んでいる[『Tàu』は華人を意味する]。うるち米の粉を薄く延ばして層をなすように蒸し、できあがると同じ型のなかで続けて層を重ねるように蒸していく。人々はその上に、ラードで茶色くなるまで揚げた、玉ねぎ、スジホシムシ〔中国語で『沙虫』といい、中越国境地域沿岸部で多く水揚げされ、はらわたを抜いて市場で売られている〕、あるいは乾燥エビを載せる。食べる時には小さく切り分けて、竹でできたフォークで突き刺し、めいめいが調合した酸っぱいヌォクマムに浸す。サンジュウの人々は、冬至の祭りの時に調理する。」[Đặng and Tống 2001: 604]

この記述から、ソイエックが華人に由来する料理であるとベトナム・クエンニン省で明確に意識されていることがわかる。筆者が中国やベトナムでソイエックを食べたのは、いずれも夏の時期である。しかし、中国・北海の客家人には同種の米粉の食品が中元節と結び付いた儀礼食であったが、クエンニンのサンジュウには冬至と結び付いた儀礼食になっており、一年を通じて食べられていることがうかがえる。

以上のように、欽州、廉州からベトナムのクエンニン省にかけての地域は、同一の文化的特徴を有しているといえる。

3. 「ヌン族の華人」とは誰か

「ヌン族の華人」とは、中越国境地域沿岸部に居住する人々のうち、現在のベトナム・クエンニン省（当時のハイニン省）に1946年に成立した「ヌン自治区」から、1954年にベトナム南部へと移住した人々とその子孫のことである。

後述するように、ホーチミン市に現在居住するヌン族の華人のなかには、「ヌン族」という名称に違和感をもつ人もいる。また、オーストラリアのヌン族の華人の団体は、中国の欽州と廉州に祖籍をもつ中国人の団体であるとして、「欽廉同郷会」という名称を名乗っている。そのオーストラリアの欽廉同郷会の内部出版物には、巻頭の記事で次のように、自分たちがヌン族ではなく中国人であることを明確に定義している。

「ハイニン省のヌン族〔原文は『農族』〕は、もともと中国の広西と雲南の辺境の山のなかに住むヌン族人〔原文は『農族人』〕であるといわれたり、あるいは、ハザン〔原文は『河

陽』, トゥエンクワン, ランソン一帯に住む, ヌン・チー・カオ〔原文は『農志高』〕の後裔であるといわれたりしているが, それらはでたらめで, まったく根拠がない。ハイニンのヌン人〔原文は『農人』〕は百パーセント中国人である。合浦, 欽縣〔ママ〕, 靈山, 防城からハイニンへ移住し定住した中国人である。この言い方が正しい。〕〔楊 2003: 1〕

このハイニンのヌン族がランソンのヌン族とは明らかに異なるという認識は, ヌン自治区の成立よりも前からフランス人のあいだには明確に存在し, そのことについては日本人も戦時中にすでに研究をしていたことも付記しておきたい。

フランスの法学者, ジョルジュ・ルヴァスールの『南京条約後のインドシナにおける中国人の法律上の地位』(1939 年) は, 複数の邦訳があるが, たとえば成田節男訳ではヌン族について次のように書かれている。長くはなるが明瞭な説明であるため, 現在の漢字, 仮名遣いに直して, 該当部分を以下に記す。

「人種学上, ヌン族がタイ人種の一支部であるとはずっとまえからよく知られている。ヌン族自身の伝説では彼らは支那の出身である。おそらく土地が悪く, そのため飢饉が頻発したのでそこを去ったのであろう。この移住は十六世紀か, 或はもっと早く始まったと思われる。(中略)

しかるに支那人の移住はやまなかった。フランスが支那の国境にいたるまで東京を鎮定し, その恐るべき山賊を掃蕩したときには, 安南人すら好んで足をいれず, 剽盗のため人口希薄になったこの地方の探検は重大問題となった。大部分軍政地区であったが, この地方的政権は支那人の移住を奨励することの上策なるを信じた。一つの方法はこうだった。支那人の移住者を外国人として取り扱わず, 之に国民としての制度を課す。而して支那人を幫の団体におかず, 之を土着人として安南人共同体中に登録するという方法であった。この方法はとくに, 国境に一ばん〔ママ〕近いモンカイ地方で行われた。(中略) ときにこの移民はヌン族の名において登録された。かくのごとく, 隣接州で用いていた名称を利用したが, 必ずしも拠り所のないことではなかった(何故ならば, 真のヌン族自身も支那から来たものであるから)。しかし人種学的にいえば全然の間違いである。こうして全体的な集団組織ができあがった。(中略)

この人工のヌン族は非常に多数で, かえって真のヌン族が忘れられ, 或は少くともヌン族とはみんなこんなものだろうと思うようになった。即ちヌン族とは支那人的な人種言語文化を有し, 安南部落の帳簿に登録され, 安南の納税証明書を処理することを許された人種であると。〕〔ルヴァスール 1944: 100-102〕

ここでは、ランソンのヌン族は「真のヌン族」、モンカイへ来た新しい中国からの移民は「人工のヌン族」と区別されている。この「人工のヌン族」こそ、「ヌン族の華人」にあたる。

前述したように華人にあたる民族は、現在のベトナムの民族分類では、「ホア (Hoa) 族」になるが、そのほか、シナ・チベット語族のシナ語系 (ハン) グループには、「サンジュー (Sán Diu) 族」と「ガイ (Ngái) 族」が含まれている。「サンジュー」の語は、もともと広東語の「山子瑤」(サンチーイウ) に由来するため、ヤオ族 (瑤族) の一派とも考えられる。²⁾ 「ガイ」の語は、客家語の一人称「我」の発音に由来する。ホーチミン市では華人のなかに「客家」が含まれているため、「客家」と「ガイ」が、言語や生活習慣、そして民族的アイデンティティについての当事者自身の認識のうえで、どのように明確に区別ができるのか筆者は疑問に思っている。ベトナムで出版された英語の概説書にも、「民族誌的記述では、ガイ族はしばしばホア族と同じとされている」という注が付いている [Dang *et al.* 2000: 236]。しかし、後述するように、現在のヌン族の華人の語りや歴史記述からは、今日のベトナム政府の民族政策のなかでの行政概念とは別に、特定の地理的歴史的条件下で「ガイ」と「客家」が民俗概念として明確に区別されていたと考えられる。

ホーチミン市での筆者の調査からは、広東語を共通語とするホーチミン市の華人社会において、ヌン族の華人の自称及び他称として、言語の違いに対応した「防城人」(フォンセンヤン) や「海防人」(ホイフォンヤン) という広東語の民族カテゴリーが存在することを確認できた。ヌン族の華人の話す「防城話」(フォンセンワー) あるいは「海防話」(ホイフォンワー) とは、中越国境地域沿岸部で話されている広西チワン族自治区の広東語、「白話」のことである。

そして、この「白話」は、中越国境地域沿岸部の市場町でそうであったように、ヌン族の華人のあいだでは、もともと母語というよりは共通語に過ぎなかったのではないかと考えられる。なぜなら、このヌン族の華人のなかに、さまざまな民族集団が混在しているからである。ベトナム・ビントゥアン (Bình Thuận) 省のソンマオ (Sông Mao) では、自身がヤオ族であると公言するヌン族の華人にも筆者は会った。また、ソンマオの別のヌン族の華人からは、広西では客家人も広東語で話しているという説明を聞いた。筆者の見解は、「ヌン族の華人=ガイ」というものではなく、「ヌン族の華人>かつてハイニン省 (現在のクエンニン省) に居住したガイ」というものである。中国広西チワン族自治区においてもベトナム北部においても、「白話」が話せるかどうか、「僱話 (ガイワー) 」(客家語) が話せるかどうかは、民族的な出自や帰属とは直接の関係がない。広東語話者を「広府人」、客家語話者を「客家人」というように固定的に想定してはならないと筆者は考える。

さらに、「客家」という民族カテゴリーについても多くの注意が必要だと筆者は考えている。

2) ヤオ族 (瑤族) は、ベトナム国家の民族カテゴリーでは、「ザオ (Dao) 族」となっている。

ベトナム北部の文脈での「客」(Khách)とは、そのさらなる北の中国から来た「北客」のことで、中国からの移民一般を指している。そして中越国境地域沿岸部を含む中国広西チワン族自治区の文脈での「客」とは、主として東から来た広府人の商人(「客商」)のことを指しており、必ずしも客家人の移民を指すわけではない。なお、広西チワン族自治区には新来の移民を指すカテゴリーとして、「客」のほかにも「来」という言葉がある[鍾 2011: 216-218]。

筆者がホーチミン市で最初にヌン族の華人の観音廟を 2005 年に訪れた時は盂蘭盆³⁾の時期で、廟の盂蘭盆の祭宴にも招待された。その時に出的料理は菜食ではなく、中国では客家の代表的な料理とされる「扣肉」(豚肉の角煮)だった。そのため筆者はヌン族の華人の民俗に客家の影響をその時すぐ認めた。しかし後年、中越国境地域のベトナム側において、「扣肉」(ベトナム語では「Khâu nhục」)を食べる機会を得て、これが客家の代表的な料理としてではなく、この地域の代表的な料理としてベトナム人に受け入れられていることに気づかされた。つまり、「客家」という、出自と移動にかかわる漢族の民族カテゴリーに加えて、人々自身が用いる「欽廉」や「ハイニン」という中越国境地域の地理的な領域にかかわる民族カテゴリーにも目を向けるべきだと考える。⁴⁾

この廟での民族カテゴリーについての人々の説明の言葉も一様ではなかった。この廟を組織している「ヌン族」とはどのような人たちか、という意味の筆者の問いかけに対しては、以下のような多様な語りを人々から一度に聞くことができた。

A 氏 (女性):

ここは「北越」から来た「海防人」の「海防廟」。自分は「広府人」で、友だちの手伝いで来ているだけ。〔自分の本籍は〕「広東花県」。あっちで祈っている人たちが「海防人」、彼らが使っている言葉が「海防話」。

B 氏 (人々の祈願の手伝いをしている男性):

〔「海防人」は「客家人」か、と聞いたところ〕自分たちは「客家人」ではない。話している言葉は「広府話」。「客家人」とは「ガイ」のことだ。

C 氏 (男性役員, 1957 年生まれ):

自分たちは「客家人」だ。「欽廉防」、つまり「廉州」から来た。「広東省防城県」の「防

3) ホーチミン市の華人社会では、彼らの祖籍地である中国南部と同様に、旧暦の 7 月に「盂蘭盆」(日本語では一般に「お盆」)の行事を行う。行事が行われる場所は仏教寺院に限られず、民間信仰の廟でも行われ、華人に限らず近隣のキン族住民も行事に参加している。

4) アメリカに移住したヌン族の華人が組織した同郷会の名称は、「ハイニン (海寧)」を冠しているため、「ハイニン」も「欽廉」と同様、地理的な領域に関係した民族カテゴリーであると考えられる。

城客家」。客家はどこ場所にもいる。もともといたところは中越の国境で、山地の田舎だ。「儂族」とか、「族」というのは少数民族に対する言い方で、「山胞人」〔山岳少数民族〕を含んでいる。「京族」とか、田舎に住んでいる人に対する言い方。自分たちは「防城人」。黄亞生が、ハイニンから連れてきた。集団で移住して、そこで登記させてから、あちこちに移住した。自分たちのように都会にきた人もいれば、田舎へ行った人もいる。

D 氏（男性）：

自分たちは「儂族」だ。3 万人あまりが、1954 年に「北圻」から「中圻」、ファンティエット（Phan Thiết）の上のソンマオに移住してきて、そこから分かれた。

E 氏（C 氏と同姓の男性役員）：

自分は「客家人」ではなく「広府人」。「広東省」。

「欽廉防」とは、欽廉に防城港を加えた総称である。ホーチミン市チョロン地区の客家人の同郷会「崇正会館」の会所は、潮州人の同郷会館にあたる「義安会館」のなかにある。そこで崇正会館の役員から筆者が聞いたところでは、崇正会館の下部組織として「欽廉防同郷会」がある。上記の C 氏は、その活動にも参加している。

なお、ソンマオの観音廟の理事会が、ビントゥアン省政府の許可を得て印刷した内部出版物（同じ内容が中国語とベトナム語の 2 言語で書かれている）には、ソンマオに来た「ヌン族」に次のような人々が含まれていると説明している（中国語版に即して訳し、ベトナム語版については訳注を割注で示す）。

「ソンマオに定住した各民族のなかではヌン族が主になっている。ソンマオのヌン族はもともと漢人である。しかし、ヌン族と称される人々と華僑と称される人々には区別がある。

ソンマオのヌン族の祖先は、中国広東省防城県五洞の客家族人〔対応するベトナム語の文章では『người Ngái』〕であり、18 世紀と 19 世紀にベトナムに入植し、ベトナム籍を取得してモンカイ（Móng Cái）、ハーコイ（Hà Cối）、ダムハー（Đầm Hà）などで暮らした。

また一部のヌン族の祖先は、中国広東省恩平県の嘉応州〔ママ〕の客家族人〔対応するベトナム語の文章では『người Hắc Cá』〕である。彼らは 1865 年〔ママ〕から 70 年にかけて移住し、モンカイ、ハーコイ、ダムハーなどに居住した。五洞の客家人と客人人〔ママ〕は、1903 年に「ヌン族人」という総称を与えられた。ソンマオには他に、マンタインイー（曼清依，Mán Thanh Y）、サンチー（汕止，Sán Chi）、タインファン（清凡，Thanh Phan）、そしてトー（土，Thổ）〔対応するベトナム語の文章では『少数のトー』〕となってい

る」の各民族がいて、彼らは 1954 年にソンマオに移民した。」[観音廟理事会 2004]

この記述では、18 世紀と 19 世紀に広東省防城县から入植した多数派の移民を「ガイ」とし、19 世紀後半に広東省恩平県から来た新来の移民を「客家」や「客人」として区別している。さらに、具体的に他の民族の名があがっているが、そこに「ザオ」や「サンジュウ」の語が含まれていないことも興味深い。この地のヤオ族（ザオ族）の女性は頭上に箱のようなものを載せた特徴的な民族衣装を着ていて、現在でもこの地域の路上や市場でよく見かける。また前節で述べたように、ソンマオにはヤオ族の「ヌン族の華人」が確かにいるので、当然「ザオ」が含まれてもいいはずである。⁵⁾「サンジュウ」は、前述したようにヤオ族の一集団と考えることもでき、また以下で紹介するように客家とは近い関係にあるため、ソンマオの人々のなかでは独自の「少数民族」としては考えられていないのかもしれない。なお、広東省東部の嘉応州は客家の故郷として有名であるが、恩平県は広東省西部にある。嘉応州に祖籍をもち、恩平県を経て移民した客家の意味だと考えられる。

モンカイ、ハーコイ、ダムハーは、かつて多くの華人商人が商店を設けたクエンニン省沿岸部の市場町である。中国広西チワン族自治区の市場町のように、そこでは広東語が共通語として話されていた。上記の C 氏の説明にあるように、ヌン族という民族カテゴリーを考えるうえで、農民か商人かという生業、農村部か市場町かという居住地域が、分類のための重要な指標となっている。農村部の農民には「族」を付けて呼び、市場町の商人には「族」ではなく「人」を付けて呼ぶべきだというのは、都市化したホーチミン市郊外に住む、今のヌン族の華人の説明ではあるが、おそらく、かつてハイニンにいた時の認識でもあったと思われる。

中越国境地域には高い山々が連なり、山岳少数民族が多数居住しているが、彼らと市場町の華人商人とは、生業を通じて、さらには婚姻を通じて深く結び付いていた。そのことは、たとえば、以下に引用するヌン族の華人の家族史からも明らかである。

シャーリーン・リン・ウンは、1967 年にベトナム共和国で生まれた華人で、1978 年にベトナムを離れ、アメリカへ移民した。彼女が英語で書いた家族史 [Ung 2015] には、彼女の祖父母がハーコイで暮らしていた時の興味深いエピソードがある。そこからサンジュウの人々が、山岳少数民族と華人商人のあいだで暮らしていたことを想像できる。

シャーリーンの父方の家系は、中国の防城にいた「呉」姓の客家である。1898 年に飢饉があり、彼女の曾祖父と曾祖母は、幼い祖父とその弟を連れて、ベトナム側のハーコイへ移民し

5) ベトナム民主共和国で 1959 年に発行された『ベトナムの少数民族』掲載の少数民族の表には、メオ（モン）・ザオ（ヤオ）グループの分類のなかで、「マン（Mán）、ザオ（Giào）とも呼ばれる。マンには多くの支がある」[伊藤 2008: 59] という記述がある。「マン」と「ザオ」（現在の表記では Dao）が同じであるとしたならば、ザオはマンタインイーとして表現されているという可能性はある。

た [Ung 2015: 62-63]. 彼女の祖母の家系は、「洗」姓のサンジュウである。彼女の曾祖父と祖母の父（祖母の側の曾祖父）とは、お互い義兄弟のように親しく、自分たちそれぞれに子どもが生まれたら結婚させるという約束をしていた。そして、その祖母の家はモン族との商売で生計を立てていた。モン族は自分たちの栽培した、染料の原料になる植物をもって一日かけて祖母の家へ来て売り、一晩家に泊まってから遠い山の家へと帰った。ハーコイの人々はモン族が邪悪な力をもっていると信じていたため、その生産物を手に入れるには仲介する人々が必要だった。この仲介の仕事を、モン族と交渉することができ、家にも泊めることができるサンジュウがしていた [Ung 2015: 7-8].

4. 護国観音廟の成り立ちと移動

ベトナム北部における護国観音廟の設立については、前述のソンマオ観音廟理事会の内部刊行物に詳しい記述がある。該当部分を訳すと次のようになる。この刊行物では同じ内容が中国語とベトナム語の2言語で書かれているが、中国語の文章とベトナム語の文章では微妙に表現が異なる。前節で引用した箇所では、18世紀と19世紀に広東省防城県から入植した多数派の移民を「ガイ」とし、19世紀後半に広東省恩平県から来た新来の移民を「客家（ハッカ）」や「客人」とし、両者を区別していたが、以下で引用する箇所でも、前者を「ガイ」、後者を「客家（ハッカ）」として区別している（中国語版に即して訳し、ベトナム語版については訳注を割注で示す）。

「この廟を建設するのに功があったのは、潘姓のハイニンの知府である。彼は客族人〔対応するベトナム語の文章では『ガイ民族の地元の人』〕であった。知府の役職をミンマン（明命）帝から与えられて、父子代々その職務を継いできた。その潘姓の最後の代の潘方容〔後述〕が、モンカイとハーコイのあいだの4号路にある霊山に、観音廟〔ママ〕を1820年に建て、『霊山寺』と名づけた。そしてこの廟は、刺史の范文碧によって1840年に改修された。この廟は当時、ハーコイとダムハーのヌン族の城隍廟であった。

1864年〔ママ〕から70年にかけて、ハイニンの知府の黄徳士が、客家人がハーコイやダムハーへ移民し、そこで商売をすることを許可し、また彼らが観音をもってきて祀ることを許可し、彼らの習慣で祭祀を行うことも許可した。そして知府は自ら指導して祭礼を組織した。

1870年になって霊山寺に観音が祀られるようになり、『観音廟』と改名した。観音廟の毎年の祭祀儀式は、陶徳点、厳道台などの知府が主催し、年中行事になった。1896年には、潘方容が人々の尊敬を集めて『案首公公』として観音廟に祀られるようになり、このころから『護国観音廟』と呼ばれるようになった。タプダイソン〔十大山, Tháp Đại Sơn〕、バー

チェー〔巴者, Ba Chê〕, ダイディエンナム〔大田南, Đại Điền Nam〕, チュクハイソン〔竹海山, Trúc Hải Sơn〕, ランケー〔諒溪, Lạng Khê〕, マーテナム〔馬濟南, Mã Tế Nam〕, ナーファー〔那發, Nà Phá〕, ダムハーファー〔潭河發, Đàm Hà Phá〕, ダムハードン〔潭河洞, Đàm Hà Động〕の客家族人〔対応するベトナム語の文章では『ガイ人』〕, サンジュウ族, トー族, ヌン族人が参拝に来て, 廟の改修〔対応するベトナム語の文章では『建設』〕のために貢献した。

1896 年からハーコイの護国観音廟では, 観音娘娘, 案首公公, 関聖帝君を祀るようになった。」〔観音廟理事会 2004〕

ミンマン帝の在位期間は, 1820 年から 40 年までであるため, 潘氏が知府の役職を世襲することをミンマン帝に認められたのが, 最後の代の潘方容の時代であるというのは矛盾する。しかし, この伝承は一面的には史実をよく反映しているとも考えられる。このミンマン帝在位の時代に地方行政制度の改革が行われ, 中央から官吏が派遣されて地方が治められるようになった。嶋尾稔の研究によれば, ミンマン帝は清朝にならって, 省一府一県・州の 3 段階の地方行政制度を設け, それぞれに対して総督・巡撫・布政使・按察使, 知府, 知県・知州を派遣して統治した〔嶋尾 2010: 276-277〕。現在のクエンニン省にあたる地域は, 1831 年に「広安省」となり, そのなかでモンカイにあたる「萬寧州」とティエンイエンにあたる「先安州」は「海寧府」に属した。そして, 萬寧州と先安州は, 黎朝時代からその藩臣である潘氏が世襲的に治めていた〔嶋尾 2010: 278-279〕。その後, 中央から官吏が派遣されるいっぽうで, 在地の土豪に肩書が与えられ, 地方の秩序維持に貢献することで在地の世襲勢力は存続した。萬寧州の場合, 1848 年に「安良社役目潘廷妥」という人名が史料にあらわれ, それは「役目」という肩書を与えられた在地の有力者と考えられる〔嶋尾 2010: 306-307〕。

このソンマオの護国観音廟の伝承で 19 世紀後半に名前の出てくる知府がすべて潘姓ではないのは, 当時中央から派遣された官吏が, 知府としてハイニン（海寧府）を治めるようになったことを反映していると考えられる。

この伝承の記述では, いつから護国観音廟がハーコイの町のなかにあるのかが明確ではないが, おそらく 1896 年に建てられたのであろう。1864 年から 70 年にかけて入植した客家人がハーコイの町で商売を始め, そこに中国からもってきた観音像を祀っていたが, そのころはまだ中心的な宗教施設は靈山寺であった。当初, 靈山寺は城隍廟の役割を果たしており, おそらく北部のキン族の村落にみられるような, 仏教寺院「厨」（Chùa）, 城隍神を祀る「亭」（Đình）, 特定の神を祀る「壇」（Đền）, という 3 つの宗教施設の複合体が靈山という場所に作られていたのではないかと考えられる。そして 1896 年にハーコイに新たに観音廟が建設されて, 靈山寺を建設した潘方容は, この地を長年治めてきた地主である潘氏を代表して, 土地神のようなかた

ちで、新たな中国式の観音廟に祀られるようになった。⁶⁾ その時に「護国観音廟」という名称が生まれたのだとしたなら、この「護国」の「国」とは、潘氏が治めていたハイニンの地を指したのではなかろうか。

その後の20世紀に成立したヌン自治区は、現在のモンカイ市、ハイハー（Hải Hà）県、ダムハー県、ティエンイエン（Tiên Yên）県、バーチェー県、ピンリウ県、ディンラップ県（現在はランソン省）、を含む地域にあたる。中越国境の町モンカイに加え、現在のハイハー県のクエンハーと、ダムハー県のダムハーが、海に近く河川交通の要衝で、1970年代末の中越紛争まで、華人が住民の多数派を占める町として栄えた（写真2）。クエンハーは、長くハーコイとして知られてきたチャイナタウンにあたる。ハーコイは漢字では、「河檜」、「河薈」、「下居」、「下該」などと書かれる。

アメリカにあるヌン族の華人の同郷会、「美国海寧同郷会」が会所兼護国観音廟を新築した時の「特刊」によると、ハーコイのヌン族の華人は、一部のカトリック教徒を除き、絶対多数が、護国観音廟の観音娘娘を信仰していたという。護国観音廟では、毎月の日暦一日と十五日、そして旧暦の新年に人々が参拝し、また旧暦二月十九日には「燃放花炮大会」、旧暦七月十四日の午後から十六日の午前にかけては「盂蘭勝蘊大会」が行われた。「燃放花炮」は、ソンマオへ移ってからは抽選になったが、ハーコイで行われていた当時は実際に花火を打ち上げ、落ちてくる番号が書かれた籤を信者たちが競って奪い合ったという [力 1996: 50]。



写真2 ダムハーの町に残る古いショップハウス（2012年2月 筆者撮影）

6) ベトナム共和国軍を退役したヌン族の華人の会が編集したヌン自治区の歴史の本では、ハーコイの町にあった護国観音廟は伝統的な中国様式の建築であったと書かれている [Tran 2013: 94]。



写真3 クエンハー（ハーコイ）の町の護国観音廟の跡地（2012年2月 筆者撮影）

この「焼放花炮」は、「花炮節」や「花炮会」として、現在中国广西チワン族自治区では、トン族、チワン族、漢族、ヤオ族、ミャオ族等、各民族のコミュニティがそれぞれ1年から3年に1度行う大きな祭礼になっている[莫 2002: 108-111]。しかし、これはもともと広西の民俗ではなく、広府人商人の進出とともに伝わった珠江デルタ流域の広府人の慣習である。筆者は「花炮」を、香港の伝統的な祭礼で何度も見たことがある。⁷⁾ 塚田誠之によると広西で花炮を打ち上げることは、「清代、広西東部の都市の広東人移民のもので旧暦二月二日に行われる『春社』の祭祀行事の一環として開始された」[塚田 2000: 281]。「焼放花炮」の慣習がハーコイにあることから、ハーコイが中越国境地域の中国側の市場町と共通の性格をもっていたことが理解できる。なおこのハーコイでの祭日は旧暦二月十九日であるが、これは観音の誕生日、「観音誕」にあたる。

筆者は、2012年にベトナム北部を訪れた時に、ハーコイの町の観音廟の跡地を特定することができた。ハーコイの中心部に、ベトナム中部の港町ホイアンのような、2階建ての華人のショップハウスの建物が並んだ通りがあり、そのなかの一角に護国観音廟の跡地がある。敷地内に1個の井戸が残されているだけで、その面影はまったくない。敷地の上には、政府の施設である「文化の家」が建てられていた（写真3）。

この通りの先には広場があり、地元の人からはもともと市場があった場所だという説明を聞いた。この元の市場の場所にも「文化の家」が建てられていた。この地のチャイナタウンは、今まで2度の圧力を受けて消滅した。最初の圧力は、ヌン族の華人の南部への大規模移

7) 香港では番号が付いた紙製の神輿のことを「花炮」といい、番号が当たったグループ（その会のことを「花炮会」という）は、その神輿をもって帰り、神輿に載せられた小さな神像を1年間預かる。

動が起きた 1954 年のベトナムの南北分断と、その後の社会主義化である。そして次の圧力は、1978 年から 79 年にかけての中越紛争である。

2012 年当時、ハーコイに建設中の仏教寺院において地元出身のキン族の尼僧から護国観音廟にまつわる興味深い伝承を聞いた。1956 年、57 年ころに、政府が宗教活動を禁止して、観音廟を破壊し、その前の川へと観音像を捨てた。しかし、不思議なことに 3 体の観音像が岸に打ち上げられ、近くのフーハイ社の村人が拾って密かに家に隠した。そして、1990 年になってから村で廟を作り、この観音像を祀ることにしたという。

2012 年に筆者は、ヌン族の華人とその護国観音廟が移動したベトナム南部の町、ビントゥアン省ソンマオの町を訪れた。

1940 年代末に成立したヌン自治区は、フランスの敗北のために事実上あまり機能しないうちに解体し、それを担った 7 万 5 千人の人々が 1954 年の南北の分断の際に、南ベトナム（ベトナム共和国）のビントゥアン省のマオ川流域と、その周辺へ移動した [伊藤 2009: 133]。この移動の中心人物が、ヌン自治区を率いた黄亞生將軍であった。現在、ビントゥアン省におけるヌン族の華人の中心地である、ソンマオの町の中央に建てられている観音廟も黄亞生が建設費を出して建てられた。

その観音廟に今も残る「拡建滝毛護国廟碑記」（1958 年）には、黄亞生（碑文では「原大佐」とあり、肩書きは「元大佐」になっている）の名字が繰り返しあげられて、その功績が讃えられている。なお、ソンマオの漢字表記は、通常「潼毛」であるが、この碑文では「滝毛」となっている。また、現在この廟の門には、「観音寺」及び「CHÙA QUÁN ÂM」と書かれていて、観音廟であることや仏教寺院であることが強調されているが、この碑文に「護国廟」とあることから、1950 年代には「護国廟」という名称であったことがわかる（写真 4）。⁸⁾

ソンマオは、ビントゥアン省の省都ファンティエットから、車で 1 時間ほど内陸部へ入ったところに位置する。筆者がソンマオへ入った時には、ちょうど葬礼の行列が町の中心から郊外へと車道を歩いて出てきたところだった。死者が長寿であったため、赤い獅子舞も加わっていた。後で地元の人々から聞いたところでは、ホーチミン市から楽隊を呼んだとのことである。この出来事からも、ソンマオのヌン族の華人とホーチミン市のヌン族の華人が、日常生活のうえで密接な関係をもっていることがうかがえた。なお、ホーチミン市からファンティエットまではバスで 4 時間ほどかかる。

8) 「拡建滝毛護国廟碑記」（1958 年）の碑文は次のとおりである。

「邇我同胞於公元一九五四年甲午初秋為擁護政府趨向自由集体南移深荷政府濟助及原大佐黃公亞生領導定居滝毛當時黃大佐循習俗恂民撥款創建護國廟祀奉觀音娘娘暨列位尊神以期保境安民消災賜福惟艸萊初開構造簡單迄今數載日漸陳朽黃公乃再撥鉅款大加擴建余等忝受委託負責督造諷吉奧工本年臘月克告落成□□廟貌巍峩金容肅穆益啓群衆崇敬之誠更增同胞向善之念於是境安人泰福集祥臻咸叨佛力扶持永沐神恩浩蕩矣至于黃大佐為公益之至誠具善意之義舉當與斯廟昭其久遠焉爰勒石誌之」



写真 4 ソンマオの護国観音廟の門（2012 年 8 月 筆者撮影）

ソンマオの町の周囲には、水田が広がり、廟や祠堂が周囲にも点在しているが、観音廟のある町の中心部は、歩いて回ることができるほどの規模である。街路樹が繁り、路上にはコメの籾が敷かれていた。

地元の人々から聞いたところでは、ソンマオにもともと木はなく、周りの田も、「下の」（「南方の」あるいは「川下の」）、「シムロー人」（チャム族）の土地だったという。ソンマオの近くに、チョーラウという、ソンマオよりも大きな町があり、そこを通過してソンマオへ入る時に、筆者は頭に白い布をまいたチャム族らしい男性を町のなかで見かけた。

ヌン族が入植した 1950 年代のころは、町の西に軍隊が駐屯していて町は賑わっていたという。黄亞生将軍が近くに発電所を作って、電気が通るようになった。黄将軍は清廉な官吏で私財を自分の家族には残さなかったということも聞いた。

ソンマオへの入植当初、ヌン族の華人は、タバコ、サトウキビ、パパイヤ、バナナなどを作る農業に従事していた。しかし、水に恵まれなかったため、ドンナイ（Đồng Nai）省など他地方へ再移住する人も出た。ドンナイ省のロンカイン（Long Khánh）の地味がよく、さらにディンクァン（Định Quán）の地味はもっとよかったため、ロンカイン、ディンクァンへとヌン族の華人がさらに多数移住したという説明を聞いた。前述したホーチミン市の護国観音廟があるタンフー（新富）郡の「茶園」という場所も、もともとは市街地ではなく、ヌン族の華人が農業をするために再入植した土地である [芹澤 2009]。

ソンマオでコメやコーヒーが作られるようになったのは、近年ダラット方面から水が引かれるようになってからだという。今は水田ができるようになり、三期作が行われている。中国へ輸出するコメを加工する大きな工場を経営するヌン族の華人にもソンマオで会った。このほ

か、ビントゥアン省はドラゴンフルーツの産地として有名であるが、日本へ輸出するためのドラゴンフルーツの加工工場もソンマオにある。

ソンマオの町のなかで籾を干す作業をしているヌン族の華人と話すと、今の時代は、お金持ちは出国してしまい、貧乏人がソンマオで農業に従事するのだという説明であった。この人の家族にも出国したメンバーがいて、家族はバラバラになっているとのことだった。町はずれの小さな廟（後述）では、イギリスに出国した元住民の寄進で、廟の修理が行われていた。

ある地元の住民の説明では、ソンマオの1万から1万5千ほどの人口のうち、8割は華人だという。筆者の観察では、町のなかでは広東語がふつうに使われていた。しかし、市場に買い物に来ていた女性のなかには広東語が解せないキン族がいたのを筆者は確認した。

ソンマオの観音廟の起源については、廟内にある「傳香人徐公立定之位」という位牌が手掛かりになる。筆者のソンマオ訪問時には、この徐立定がハーコイからソンマオに観音廟の線香の灰の一部をもってきた人物であるという説明を聞いた。しかし、観音廟理事会の内部出版物では、ハーコイの護国観音廟の神格の位牌と、祭祀のための器物と、線香の燃え残りをソンマオへもってきたのは、「鄧玉光（又名保保）」であると書かれている〔観音廟理事会 2004〕。なお、筆者のソンマオ訪問時にも、その人物は「鄧玉光（宝宝）」〔ママ、「保保」と「宝宝」とは広東語の音が同じ〕であるとして、筆者のノートに人名を書いて説明した人もいた。

2007年にハノイの労働出版社から出版されているベトナムの華人団体を総覧する本では、ソンマオの護国観音廟の起源を次のように説明している。

「護国観音廟の始まりは、徐立定という客家人が、清朝の乾隆〔ママ〕の時代に、広東省恩平県の観音娘娘を心から念じ、ベトナムへ向かう道中、観音娘娘の加護を願い、その後、その観音娘娘をハーコイの町に安置して、香火を継承したことに由来する。」〔胡・范 2007: 386〕

この記述から、ソンマオの観音廟に位牌の祀られた徐立定が客家人であり、広東省恩平県からハーコイに観音をもち込んだ人物であることがわかる。乾隆年間は1736年から95年までであるため、おそらく実際には100年遅いのではないと思われる。観音廟理事会の内部出版物には、前述したように、1864年から70年にかけて広東省恩平県の客家人がハーコイの町に入植して商売を始めたと書かれてある。⁹⁾

9) ヌン自治区の歴史書の説明では、黎朝の王族を名乗る山賊のレ・ズイ・フンが1861年にクアンイエンで活動を始め、阮朝の軍隊が中国欽州からの援軍の助力を得て1865年に平定するまでの4年間、ハイニンの人々は深刻な飢餓と困難を経験した。客家はこの機に乗じてハイニンに侵入し、定住したという〔Tran 2013: 21〕。「侵入」(invade) という表現からは、中国からの軍隊の進駐と客家の移民との関係を思わせる。

そして 1950 年代に鄧玉光が護国観音廟のゆかりの品々をハーコイからソンマオへもち込み、黄亞生が廟宇建設に協力することで、その信仰が北部から南部へと引き継がれた。さらに、ベトナム南部各地へヌン族の華人が再移住していくにつれて、各地の移住先にも護国観音廟が建設された。1975 年のベトナム戦争終結後は、多くのヌン族の華人が国外へ移民した結果、アメリカやオーストラリアなど、国外にも護国観音廟が建設されるようになった。

5. 護国観音廟に祀られる神格

筆者が訪問した護国観音廟は、ベトナムのソンマオの護国観音廟、ホーチミン市・茶園の護国観音廟、ビエンホア市・福海の護国観音廟、そしてオーストラリアのシドニー市・カブラマッタの護国観音廟である。本節では、この順にそれぞれの護国観音廟に祀られる神格を紹介する。

1 つめは、ソンマオの護国観音廟である。現在ここに祀られる代表的な神格には、観音娘娘、案首公公、関聖帝君がある。この廟が本来、中国広東省恩平県から観音をもってきて祀った廟であることを考えると、観音娘娘が祀られていることは不思議ではない。観音娘娘は東アジアでは女神として人気が高く、女神信仰がとりわけ強いベトナムでは人気が高い。ホーチミン市では家屋の屋上に大きな観音像が置かれているのをよく見る。

関聖帝君（関帝）は、ホーチミン市の華人社会においては、広府人の穂城会館に祀られる「天后」（「阿婆」）と対になり、潮州人の義安会館に祀られた「阿公」として人気が高い。また義安会館以外にも多くの華人の会館や宗教施設が、関聖帝君を主神として祀っている。そしてベトナム南部では華人に限らず、仏教寺院では「護法」の神格として伽藍の一角に関聖帝君がよく祀られており、キン族が祭祀する廟のなかにも関聖帝君を主神とした廟が多くある。¹⁰⁾

これらに対し、案首公公はベトナム南部では護国観音廟にしか見られないヌン族の華人に固有の神格である。ベトナム共和国軍を退役したヌン族の華人の会が編集したヌン自治区の歴史の本では、案首公公は次のように紹介されている。

「潘方容氏は山賊を壊滅させ、地元の人たちに平和を取り戻した。彼は人々を自分の子どものように扱った。彼は人々のために寺や廟や道や橋を、私財を投じて建設した。その結果、彼は地元のあらゆる民族によって地域の『安全を守る神（案首公公）』、つまり邪悪な霊や山賊を滅するだけでなく、敵対関係を消滅させる全能の力をもつ存在へと昇格した。」
[Tran 2013: 79-80].

10) 筆者はベトナム北部ではキン族が祀る関帝廟を見たことがない。ハノイの旧市街に残る、かつて華人が祀った関帝廟には今も関帝が祀られていて、毎月旧暦一日と十五日にはキン族も含めて近隣の参拝者がある。中越国境地域のベトナム側では、チャン・フン・ダオ（元軍を撃退したベトナムの將軍）を祀る廟が現在多い。いっぽう中国側の東興市では、近年関帝廟が国境線近くに新たに作られており、信義を重んじる商売の神や仏教の護法神というよりは、中国を代表する武将という側面が強調されて関帝が祭祀されている。

ソンマオの護国観音廟では、堂内の中央に観音娘娘の神像、向かって右に閔聖帝君の神像、向かって左に案首公公の神像が祀られていて、案首公公のさらに左の隅には、「顯應本境社令真官列神位」と「都天致富財帛星君之神位」と神名が書かれた2枚の位牌も並べられている。「顯應本境社令真官列神位」にあたる神格について、護国観音廟の理事たちに聞いたところでは、「本地社王」（この土地の社王）とのことであった。この「社王」については次節であらためて論じることしたい。

2つめにホーチミン市の護国観音廟に祀られている神々を見てみよう。2005年に筆者が初めて訪れた時には、まだ廟宇の建物の改修が終わっておらず工事中であったが、建物内に入ることができた。なかには向かって左から、社王の位牌、案首公公の神像、「伏波將軍」の神像、観音娘娘の神像、閔聖帝君の神像が置かれていた。

文官をイメージした案首公公の神像には、「Cha Ông」（先人）というベトナム語の標示があるが、となりの武官をイメージし、剣を持った神像には標示がないため、近くの女性に聞くと「伏波（フォックポー）だ」との答えだった。その後、この護国観音廟の関係者に聞くと、伏波將軍はベトナム北部を攻めた中国の將軍〔馬援〕なので、わざと神名を書かないようにしているとのことだった。また、案首公公の「案」とは「安人民」（人民の安全を保つ）の意味であるという説明もその時に聞いた。

2011年に工事の完成したホーチミン市の護国観音廟を訪れたところ、同じように神像が配列されており、閔聖帝君の神像の、向かって右には、白い髭を付けた財神の神像が置かれていた（2005年時点にも財神像があったのかもしれないが、おそらく工事中であったために筆者は気がつかなかった）。いずれの神像にも、ベトナム語や中国語の神名の標示はなかった。

このホーチミン市の護国観音廟の例をみると、案首公公と伏波將軍は、文官と武官であるため、対になって祀られるものであると考えることができそうである。しかし、いっぽうで筆者は、ソンマオの護国観音廟では、案内をしてくれたヌン族の華人から、案首公公はベトナムの神だから、案首公公を祀るようになったのは南ベトナムへ来てからのはずで、ハーコイに護国観音廟があった時には、案首公公ではなく、伏波將軍を祀っていたはずだという説明を聞いた。案首公公はハーコイでも祭祀されていたためソンマオに来てから祀られるようになったという説明は誤りであるが、この説明には案首公公の祭祀よりも伏波將軍の祭祀のほうが古いということが含意されているように思われる。

伏波將軍については近年中国や台湾の学者が多数論文を書いている。アメリカの歴史学者オルガ・ドロールが、18世紀に書かれたベトナム北部についてのイタリア人神父の見聞を2002年に英訳し〔Adriano 2002〕、そのなかでハノイ（Hà Nội）の元チャイナタウンにある白馬廟に馬援が祀られていたことに言及したため、とくに白馬廟に祀られる神格についての議論が盛んに行われている〔許 2010; 王柏中 2010; 滕 2012〕。中国とベトナムの馬援信仰についての近

年の研究からは、1978 年から 79 年にかけての中越紛争の時代まで、中国南部とベトナム北部の双方において伏波將軍馬援が広く各地で祀られていたこと、つまりベトナムの独立運動を起こしたチュン姉妹を平定した中国の將軍を祀ることをベトナム政府が近年嫌ってからベトナムの馬援祭祀が衰退したことがわかっている。ベトナム・ランソン省の「鬼門関」¹¹⁾には伏波將軍廟が建てられ、17 世紀から 18 世紀にかけて中国とベトナムを行き来した両国の外交官は、必ずその廟に参拝した。そのため鬼門関の伏波將軍廟は朝貢する中国清朝へのベトナム黎朝の忠孝を当時象徴していたと指摘されている [滕 2012: 168-169]。

しかしいっぽう、国家間の関係を離れて、中国とベトナムの双方の民衆が、偉大な武将である馬援の靈驗に期待し、各地で近代まで盛んに祀ってきたとも考えられる。とくに中越国境地域沿岸部では、馬援がベトナムへ遠征した時の経路にあたる場所に多くの伏波將軍廟が建てられている [滕 2006]。

筆者は、2015 年に中国欽州市の郊外、烏雷山にある伏波將軍廟を訪れた。廟内に掲示されていた説明の文章には、古くから烏雷は海路ベトナムへ向かう時の出発地であり、現在の廟宇の建築は、解放後の 1959 年に完全に取り壊された後に 1983 年になって再建が開始された新しいものだが、その起源は紀元後 78 年に遡ると書かれていた。馬援が伏波將軍に任命されてベトナムへ向かったのは紀元後 42 年であり、馬援が亡くなったのは 48 年である [王元林 2011: 162]。そのため、この烏雷の伏波將軍廟は、かなり初期に建てられた伏波將軍廟であると考えられる。

この中越国境地域沿岸部の祭祀対象としての馬援の重要性を考えると、おそらくハーコイやソンマオにも伏波將軍が祀られていたと考えられる。ハーコイ、ソンマオに祀られていたからこそ、ソンマオから再移住したヌン族の華人が祀るホーチミン市の護国觀音廟には、今も伏波將軍が祭祀されているといえる。

3 つめの護国觀音廟として、2012 年に筆者が訪れたドンナイ省ビエンホア (Biên Hòa) 市の「福海護国廟」を紹介する。この廟の関係者によると、この廟は 1954 年に建設され、1968 年に改修されたヌン族の華人の護国觀音廟である。堂内の中央に觀音娘娘の神像 (神像が収められた壇の上には「普陀院」と書かれている)、向かって右には関聖帝君の神像、向かって左には案首公公の神像がそれぞれ置かれている (写真 5)。

注目すべきは、案首公公の神像の後ろに置かれた一枚の位牌である。そこに伏波將軍をはじめ、多くの神名が書かれてある。その位牌の中央には「當令顯應案首公公之神座位」とあり、その向かって右には、「鄧通大王」、「洪景老爺」、「華光大帝」、「猛烈將軍」の 4 体の神の名が書かれている (左から右、中央から外側への順)。いっぽう向かって左には、「伏波將軍」、「烏

11) 「鬼門関」があった場所は、現在ハノイからランソン市へ向かう国道 1A 号線が通る、チラン社 (xã Chi Lăng) である。



写真5 ビエンホアの護国観音廟の案首公公の神像（2012年8月 筆者撮影）

雷將軍」，「旗頭先鋒」，「本境大王」の4体の神の名が書かれている（右から左，中央から外側への順）。

伏波將軍は神像こそないが，案首公公の神位の右隣に神名が書かれてあり，その重要性をうかがうことができる。その隣には「烏雷將軍」という別の將軍名の神名が書かれてある。もともと「伏波將軍」という官職には，馬援よりも以前の紀元前2世紀，路博徳が南越国を攻める時に任命されており，伏波將軍廟に祭祀される「伏波將軍」にも，路博徳の場合と馬援の場合の2種類がある〔王元林 2011: 161-162〕。しかし，ここでの「烏雷」が前述の欽州の地名に由来するのかわからない。

「鄧通大王」，「洪景老爺」，「華光大帝」，「猛烈將軍」，「旗頭先鋒」，「本境大王」のうち，「鄧通大王」と「洪景老爺」は歴史上の人物に由来すると思われるが，今のところ筆者には不明である。「華光大帝」は広府人がよく祀る神である。香港では粵劇の神として知られている。もともと南方の火の神で，粵劇が上演される竹や木でできた仮設舞台は火に用心しなければならないため，粵劇団が祀っている〔顧 2015: 201〕。本稿の冒頭でも触れたように，広府人が広西へと進出するにつれて粵劇も広まったため，粵劇とともに華光大帝が中越国境地域で祀られるようになったとも考えられる。「本境大王」は，ソンマオの護国観音廟の「本地社王」と同じ神格であろう。

4 つめには、1992 年に組織された「澳州欽廉同郷会」が建設したシドニーの護国観音廟を紹介する。この護国観音廟には、中央に白い観音像、その向かって右に「財帛星君」の神像（黒い髭があり、手には金塊を持つ）、向かって左には「関聖帝君」の神像が祀られているだけである。案首公公も伏波將軍も神像や位牌がない。この廟の敷地に入ると英語の案内板の石碑がある。石碑の文章からは、オーストラリアの多文化主義に適応するうえで、中国人の文化を代表する、観音、財神、関帝の三体の神格が選ばれたことがわかる [芹澤 2014]。¹²⁾

本節の最後に、筆者は未だ訪れていないが、藤蘭花が報告しているラオス・ビエンチャンの「伏波將軍廟」の神々を紹介したい。藤蘭花は伏波將軍廟のみを論じているため、ビエンチャンに護国観音廟があるのかどうかはわからないが、この廟を祀るヌン族の華人が、ラオスに來た当初から伏波將軍と観音娘娘を信仰していたことが書かれてある。この地のヌン族の華人はもともとハイニンにいたが、そこでフランス軍に入り、フランス軍とともにラオスへ行った後、1954 年にフランス軍が撤退してラオスが独立した後もラオスに留まり、1973 年になって伏波將軍の廟を建てた。廟内には神像の「伏波將軍」を主神にして、「烏雷大王 [ママ]」、「案首公公」、「鄧通大王」、「黒山大王」が合わせて祀られている [藤 2012: 172]。

6. 社王と高山大王

「護国観音廟」という施設の名称と同様、「社王」という神格が、ヌン族の華人を示すマーカーになる。そのことをまず説明したい。

「社王」は、一般的には土地神と同じ神格である。ベトナム南部では、華人もキン族も盛んに土地神を祀っている。華人は一般に土地神を「土地」（広東語で「トウテイ」）と呼んでい

12) オーストラリア・シドニーの護国観音廟の案内板の碑文は次のとおりである。

「WELCOME

THIS AUSTRALIAN CHIN LIEN CHINESE ASSOCIATION (ACLCA) IS ESTABLISHED IN 1992.

IT WAS FORMED BY THE DESCENDANTS OF THOSE ORIGINALLY FROM CHIN ZHOU, HEFU, LING SHAN AND FANG CHENG OF THE GUAN XI PROVINCE OF CHINA WITH PURPOSE OF PROVIDING MUTUAL CARE AND SUPPORT IN THEIR NEW HOMELAND.

IN 1998 THE ACLCA ERECTED A KWAN YIN TEMPLE IN WHICH STAND [sic] THREE STATUES OF THE MOST RESPECTABLE OF ALL TRADITIONAL CHINESE GODS FOR WORSHIP. EACH SYMBOLISES THEIR OWN GENUINE VIRTUE:

KWAN YIN GODDESS OF MERCY –THE SYMBOL OF GOOD BLESSINGS, RELIEVING SUFFERING, GIVING HOPE TO THOSE IN DESPAIR AND BRINGING PEACE AND HAPPINESS FOR ALL MANKIND.

CHOI SHUN YE, GOD OF FORTUNE –SYMBOL OF BRINGING WEALTH, GOOD HEALTH AND LUCK TO ALL.

KWAN DI, GOD OF JUSTICE –SYMBOL OF COURAGE, LOYALTY AND HONESTY.

THESE GODS INSPIRE AND LEAD US TO THE SPIRIT OF KINDNESS TOWARD OTHERS.

THE ACLCA IS A NON PROFIT [sic] ORGANIZATION, PROVIDING VARIOUS SERVICES TO THE COMMUNITY AND ALSO SUPPORTING GOVERNMENT MULTICULTURAL ACTIVITIES IN A [sic] EFFORT TO INTEGRATE THE COMMUNITY INTO MAINSTREAM AUSTRALIA.」

る。キン族は土地神を、「オン・ディア（Ông Địa, 「Ông」は「翁」, 「Địa」は「地」）」と呼んでいる。「オン・ディア」は現在、ベトナム全土で土地神と財神の2体の神像のセットとして祀られることが多い。そのため、ソンマオの護国観音廟に祀られていた「顕應本境社令真官列神位」と「都天致富財帛星君之神位」も、土地神と財神のセットと考えることができよう。そして、この土地神の位牌にある「本境」という漢字も興味深い。ベトナム南部のキン族の亭に祀られているのは「本境城隍」である（ベトナム語では形容詞が後ろからかかるため、「本境の城隍」という意味で「Thành hoàng Bản cảnh」と呼ばれるが、位牌には「本境城隍」という漢字が使われていることが多い）。この「本境」が、華人のいう「本地」（広東語で「ブンテイ」）と同じで、「地元の」、「ローカルの」、という意味をもつ。中国での城隍神（「城隍爺爺」）は、文字どおり都市（「城市」）の神であるが、ベトナムでは都市ではなく農村の集会所である「亭」に祀られている。

このようにベトナム南部では華人もキン族も、土地神のことを「社王」とは呼ばない。それでは、この「社王」はどこから来たのであろうか。それはヌン族の華人と同様、中越国境地域に由来する。「社王」は、ヌン族の華人の居住地において東西南北など、村の境の複数個所に祀られる。この位置や祭日も中越国境地域沿岸部に共通する。

筆者は2015年に、中国チワン族自治区防城港市のある土地神について、地元の人の説明を聞いた。この村では東西南北に土地神があり、この土地神は東の村のもので、4つの土地神のなかではもっとも大きいものだという。当の信仰対象は石だけで、周りを囲って聖地としての境界が示されているが、覆いなどの建物はなく、石に文字や顔かたちはなく、脇のほうに離れて「東村社主土地大王社壇修建於甲申年九月二十九日」と書いた石碑がある。土地神を「社主土地大王」と呼び、その祠は「社壇」と呼んでいる。この土地神には、四月四日と十月十日の年2回の誕生日の祭日がある。村人は、外から引っ越して来た時や、結婚する時、何か建物を建てる時に、必ずここに参るという。また子どもが生まれた時や人が死んだ時にも、ここへ来て土地神に報告するという。

ホーチミン市に散在するヌン族の華人の居住地区においても、それぞれの境界に社王が祀られていたはずである。「このあたりにある」という情報を頼りに、筆者は今まで何度か探してみたことがあるが、歩きながら聞いて探すという方法では限界があり、今まで1ヵ所しかみつけられていない。それはビンタン郡にある、旧「自由村」の「社王廟」である。

このホーチミン市の社王廟は、なかには赤い位牌が1枚あるだけで神像はなく、位牌に神名が書かれている。中央は「社王公公」、その向かって右に「廻〔?〕天大王」、「高山大王」（左から右へ、中央から外側への順）、向かって左には「地頭社官」、「水口大王」（右から左へ、中央から外側への順）、という5神がある。

2012年に訪問した時に近所の人に、この社王廟の祭礼について聞いた。季節ごとに、3ヵ月

に 1 度祭日があるという。原則は旧暦の、一月、三月、六月、十二月の、それぞれ二十六日であるが、必ずしも日が決まっているわけではない。コミュニティ全体で取り組むので季節ごとに分担しているわけではない。5 つの神と一緒に祭祀するため、どの神がどの季節の祭日に対応しているということもない。

またホーチミン市の護国観音廟においても、季節ごとの社王の祭りは行われている。¹³⁾ 二月二日が「春社」、五月四日が「夏社」、七月十四日が「秋社」、十一月の冬至の前日が「冬社」になる。その間、二月十九日、六月十九日、九月十九日に 3 回「観音誕」が入り、七月十五日には「中元盂蘭勝醮」が入る（いずれも旧暦）。筆者は、2015 年に護国観音廟の関係者に、案首公公や伏波將軍の誕生日の祭日についてたずねたが、それらの神々の祭日はないという答えだった。ホーチミン市の社王廟と同様、この護国観音廟の社王も神像はなく、位牌の神名だけである。そこには、「七宿里社大王」という、社王を示す文字が書かれている。

ソンマオの護国観音廟では、「社王」は祀っていないという説明を聞いた。そしてソンマオの「社王廟」は郊外の遠いところにあるらしく、筆者は訪れることができなかった。

ソンマオの町の近くに、いくつか小さな廟があり、筆者はそのうち 4 つを訪れた。それらに祀られている神々のうち、いくつかはすでに前節で名前をみた神々であるが、ホーチミン市の社王廟にも祀られていた「高山大王」は重要である。次に、4 つの廟を紹介した後、「高山大王」について説明する。

1 つめの「玉皇廟」には神像はなく、神名を書いた 1 枚の赤い位牌があるだけである。書かれている神名は、中央に「玉皇大帝」、向かって右に 3 体、「漢朝元帥」、「閔聖帝君」、「洪景老爺」（左から右、中央から外側への順）、向かって左に 3 体、「鄧通大王」、「烏雷大王」、「本境社王」（右から左、中央から外側への順）である。この位牌では、土地神のことを「社王」と書いている。

2 つめの「大王廟」も神像はなく、赤い大きな位牌が 1 枚あるだけである。中央に「黒面土地大王」、右に 3 体、「地頭先峯水口大王」、「護国烏雷大王」、「護国案首公公」（左から右、中央から外側への順）、向かって左に 3 体、「五顯華光大帝」、「本境里社大王」、「地頭猛烈大將軍」（右から左、中央から外側への順）である。この位牌では、それぞれの神名が長くなっているため、「社王」も「里社大王」と 4 文字になっている。廟内に掲げられている 2010 年改修時の寄進芳名録の文章によると、この廟の起源は 1956 年であるという（写真 6）。

3 つめの「洪景廟」も神像はない。1 つの建物のなかに、2 枚の赤い位牌、それぞれに対応

13) ホーチミン市には護国観音廟と並ぶ、ヌン族の華人の大規模な廟として、ビンタン郡に「決勝村閔帝廟」がある。この決勝村閔帝廟の入口には「社王廟」と書かれた立派な祠があるが、そのなかに置かれている位牌は、「阮九玄七祖」という文字が書かれた、阮姓の特定の個人の、祖先を祀る位牌だけである。この閔帝廟では今や社王の祭祀が行われなくなってしまったのではないかと考えられる（2011 年の調査にもとづく）。



写真6 ソンマオの大王廟の位牌 (2012年8月 筆者撮影)

した2つの祭壇が並んで設けられている。向かって右の位牌には、中央に「烏雷大王」、その向かって右に「華光大帝」、向かって左に「太子爺爺」の3体の神名がある。向かって左の位牌には、中央に「洪景老爺」、その向かって右に「鄧通大王」、向かって左に「案首公公」の3体の神名がある。

4つめの「高山大王廟」にも神像はない。1枚の赤い位牌があり、向かって右に「高山大王」、左に「呉大將軍」の神名がある。2004年にイギリスへ移住した呉姓の男性が寄付をして廟を建設した。呉姓の20人と、その他の姓の10人が、一緒に祭祀を執り行っている。旧暦の二月二日と十二月二日が祭日である。2012年現在、イギリスへ移住した黄姓と頼姓の夫婦の寄付を受けて改修中である。「呉大將軍」は呉氏の祖先にあたる。いっぽう「高山大王」は中越国境地域沿岸部に特有の神格である。高山大王は、中国の京族、ハノイのキン族、ホーチミン市のヌン族の華人によって祀られている。

筆者は、2015年に中国広西チワン族自治区東興市江平鎮万尾の京族の亭を訪れた。その祭壇には5体の神像が祀られていた。中央には、「白龍鎮海」、その向かって右は、「徳(王)高山勅封大王」と「点雀神武」(左から右へ、中央から外側への順)、向かって左には「太祖広澤尊王」、「陳興道(チャン・フン・ダオ)」(右から左へ、中央から外側への順)、である。中国の人類学者、呂俊彪らが実地調査から聞いた説明では、「高山大王」は「高山那太上等神大王」とも称し、主に山林を管理する「山神」で、この地の京族がベトナムから中国のこの地に移って来る時に、一緒にもって来た神だという[呂2014: 70]。

ベトナムの首都ハノイでは、都城の南門にあたる場所に高山大王を祀る「金蓮祠」がある。金蓮祠に残る1772年に刻まれた碑文によると、1509年に黎朝皇帝の黎襄翼が反乱に遭って西

に避難した時に、高山大王の加護を得て後に王都を回復したことを記念して、1510 年に高山大王を讃える碑文が作られている [Ủy ban Khoa học xã hội Việt Nam 1978: 16-22, 119-123]. 許文堂が引用する、ハノイ市内の宗教施設に祀られた神祇の調査によると、100 あるハノイの亭のなかで、白馬大王が祀られている亭が 15 ヲ所、霊郎大王が祀られている亭が 10 ヲ所あり、高山大王はそれらに次いで 8 ヲ所の亭で祀られている [許 2010: 173-174]. 帝都ハノイで祀られる神々のなかで、高山大王がきわめて重要な神格であることがわかる。

7. お わ り に

この 20 年のあいだ、筆者は香港やホーチミン市に通いながら、ヌン族の華人についての情報を集めてきた。しかし近年になって中越国境地域沿岸部に赴き、その自然環境、社会環境を実際に見る機会を得たことからようやく、ヌン族の華人が祀る神についてのイメージが筆者のなかで具体性を帯び始めてきた。

中国との国境近くに高い山々が連なり、海に通じて川が流れているベトナム・クエンニン省の沿岸部、旧ハイニンは、風光明媚な土地で、旅人が一度訪れただけでも郷愁を抱かずにはいられないような魅力的な場所である。しかし歴史的にみると、中国とベトナムの双方にとって帰属の定まらない辺境であり、制御のむずかしい土地でもあった。そこに移動し、定住してきた諸民族にとっては、その辺境としての政治的な不安定にたえず悩まされてきた。とくに 19 世紀には山賊による収奪や、それにも起因する食糧不足に悩まされた。そのため、この地の諸民族は時々の政治勢力との関係で身の安全をはかり、さまざまな神々を祀る宗教施設を建設することで、この地の諸民族の凝集を高めてきたと考えられる。

その宗教施設を代表するのが、19 世紀後半になって新たに中国からハーコイの町に入植して商売を始めた「客家」(18 世紀以降、継続して入植し農業に従事した「ガイ」とは異なる人々)を中心に、19 世紀末に建設された護国観音廟である。そこには、長くハイニンを治めてきた潘氏の政治家、潘方容が「案首公公」という諸民族の守護神として祭祀された。

その後 20 世紀、日本の敗戦後に「ヌン自治区」が生まれた。黄亞生のリーダーシップの下、「ヌン自治区」にまとめられたハイニンの諸民族は、1954 年に集団で南ベトナム (ベトナム共和国) へ移住し、護国観音廟も移動した。その集団移住によってハイニンの諸民族は、「ヌン族の華人」としてのアイデンティティを強くもつようになり、彼らのコミュニティの凝集を具体的に示す宗教施設としての護国観音廟が、ビントゥアン省、ホーチミン市、ドンナイ省などのベトナム南部各地に建設された。

護国観音廟や社王廟などのベトナム南部のヌン族の華人の宗教施設に祀られている神格のなかには、「伏波將軍」、「社王」、「高山大王」など、中越国境地域沿岸部やベトナム北部に固有の神々が含まれている。オーストラリアの護国観音廟の場合のように、地方神が忘れ去られて

いく過程もみられるが、季節ごとの社王の祭日など、ベトナム南部では今も中越国境地域沿岸部に特徴的な宗教生活を維持している。

以上みてきたように、ヌン族の華人の民族性を考察するうえでは、彼らの宗教生活、彼らが祀る神々に着目することが不可欠である。そして、その民族性は、中越国境地域という文化的な共通性をもった領域を土壌とし、ハイニンという特定の場所で、19世紀から20世紀にかけての特異な歴史状況の下で、育まれたものである。別々の場所から別々の時代に来た「ガイ」と「客家」が混住し、共通語としては中国広西の広東語を話しているヌン族の華人について理解するうえでは、行政的な概念である「ガイ」や学術的な概念である「客家」ばかりに固執することは有益ではないだろう。視野を広げてベトナム各地、さらには世界各地に移動していったヌン族の華人の宗教生活に入り込み、見えるものを観察し、彼らの説明を聞くことから情報を集め、考察を組み立てなければならない。

本稿では、ヌン族の華人の宗教生活についての基礎的な情報を提供することを意図し、中国、ベトナム、オーストラリア各地での見聞、収集した文字資料を雑多に報告したが、まったく言及できなかった重要事項もある。護国観音廟をはじめとするヌン族の華人の宗教施設で行われている行事のなかで、数年に一度、不定期に行われる大規模な祭礼に「打大番」がある。ソンマオにおいても、ホーチミン市においても、1990年代以降、この行事が復活して何度も行われてきている。この「打大番」儀礼の研究は今後の課題である。

またハーコイの旧チャイナタウンには今もカトリック教会があり、ヌン族の華人のなかに、ハーコイでカトリック教徒であった人々が含まれることもわかっている。筆者が別に情報収集を続けてきたベトナム華人カトリック教会の歴史のなかに、ヌン族の華人の教会、聖職者や信徒を位置づけていくことも今後の課題として残される。

最後に、本稿で得られた知見が、「ガイ」や「客家」についての研究をこえて、より大きな研究分野のなかでの比較の材料にもなりうることを付言しておきたい。ヌン族の華人という民族集団は特異な歴史状況下に生じたものであり、中越国境地域の他の民族や、現在のベトナム社会主義共和国の他の民族に、同様の現象を認めることはむずかしい。しかし、20世紀の半ばにフランス植民地政府によって策定された「ヌン自治区」を治めた将軍が、その後のベトナム共和国への移動と定住も主導したことから、植民地化にともなう軍事行動に関係した民族カテゴリー生成の例として考えることができよう。

ヌン族の華人のなかにはフランス軍に入隊して軍人になった人々、ベトナム共和国軍に入隊して軍人になった人々が多く、彼らはアメリカへ移民した後もヌン族の華人としてのアイデンティティを強く保持している。彼らが奉じる神々や、そのための宗教施設である護国観音廟も、軍隊生活と集団移民生活、後には難民キャンプでの集団生活という条件の下で、集団内の差異をこえた統一のシンボルとしての性格を強めていった。その点で、イギリスによるインド

の植民地化の過程で、「マーシャル・レイス（戦闘に適した民族）」としてイギリス軍の兵隊にリクルートされていったシーク教徒 [Fox 1985] やグルカ兵 [上杉 2000] が、軍隊生活を通じて民族意識を醸成したことに類似している。

謝 辞

本論文は、JSPS 科研費の助成を受けた研究課題、JP16251007, JP22251003, JP26300038, JP17H04515, の研究成果の一部である。

引 用 文 献

- 伊藤正子. 2008. 『民族という政治—ベトナム民族分類の歴史と現在』三元社.
- . 2009. 「第 1 部 研究史 第 14 章 華僑・華人 第 2 節 北部」末成道男編『ベトナム文化人類学文献解題—日本からの視点』風響社, 132-133.
- 上杉妙子. 2000. 「英国陸軍グルカ兵のデザイン—外国人兵士の軍隊文化と集団的アイデンティティの自己表象」『アジア・アフリカ言語文化研究』60: 113-158.
- 王 元林. 2011. 「国家祭祀と地方秩序構建中の互動—以唐宋元伏波信仰地理為例」『暨南学報(哲学社会科学版)』第 151 期: 161-169.
- 王 柏中. 2010. 「“伏波將軍”抑或“龍肚之精”—“白馬大王”神性問題辨析」『世界宗教研究』2010 年第 4 期: 152-157.
- 河合洋尚・呉 雲霞. 2014a. 「ベトナム客家の移住とアイデンティティ—ンガイ族に関する覚え書」『客家與多元文化』第 9 期: 26-51.
- . 2014b. 「ベトナムの客家に関する覚え書—移動・社会組織・文化創造」『華僑華人研究』第 11 期: 93-103.
- 観音廟理事会編. 2004. 『平順省北平県海寧社 潼毛護国観音廟』平順省北平県海寧社: 観音廟理事会.
- 許 文堂. 2010. 「越南民間信仰—白馬大王神話」『南方華裔研究雑誌』第 4 卷: 163-175.
- 顧 書娟. 2015. 『明清広東民間信仰研究—以地方志為中心』広州: 南方日報出版社.
- 胡 芳蘭・范 篋君編. 2007. 『胡志明市與南部 華人黄金篇』河内: 労働出版社.
- 黄 濱. 2005. 『近代粵港客商与広西城鎮經濟發育』北京: 社会科学出版社.
- 嶋尾 稔. 2010. 「ベトナム阮朝の辺陞統治—ベトナム・中国国境沿海部の一知州による稟の検討」山本英史編『近世の海域世界と地方統治』汲古書院, 273-330.
- 鍾 文典. 2011. 『広西客家(修訂版)』桂林: 広西師範大学出版社.
- 世界客属第 24 届懇親大会組委會他編. 2011. 『北海客家』桂林: 広西師範大学出版社.
- 芹澤知広. 2009. 「ベトナム・ホーチミン市のヌン族の華人」『フィールドプラス』(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所) 2: 6.
- . 2013. 「ベトナムにおけるヌン族の華人の観音廟」『東南アジア大陸部における宗教の越境現象に関する研究(課題番号:22251003)平成22年度～平成24年度科学研究費補助金基盤研究(A)成果報告書 平成25年3月 研究代表者片岡樹(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)』26-40.
- . 2014. 「移民と宗教」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』丸善出版, 152-153.
- . 2015. 「広東文化としての中国薬草茶」『総合研究所報』23: 55-67.
- 滕 蘭花. 2006. 「清代広西伏波廟地理分布与伏波祭祀圈探析」『広西民族学院学報(哲学社会科学版)』第 28 卷第 4 期: 110-114.

- _____. 2011. 『明清時期広西区域開発不平衡研究』北京：民族出版社。
- _____. 2012. 「清代以来越南境内的伏波信仰研究」『民族文学研究』2012年第5期：166-176。
- 塚田誠之. 2000. 『壮族文化史研究—明代以降を中心として』第一書房。
- 莫 風欣. 2002. 『広西節日文化』香港：天馬圖書有限公司。
- 楊 興芳. 2003. 「創会艱辛路 榮歸欽廉人」 澳州欽廉同鄉会編『澳州欽廉同鄉会慶祝創会十週年特刊』紐省：澳州欽廉同鄉会, 1.
- 力 員. 1996. 「緬懷可愛的故居—海寧河檜」馬昭君主編『美国海寧同鄉会籌建新会所暨護國觀音廟紀念特刊』加州・阿罕布拉市：美国海寧同鄉会, 49-51.
- 龍 兆佛・莫 風欣. 1983. 『広西地理沿革簡編』南寧：広西人民出版社。
- ルヴァスール. 1944. 『佛印華僑の統治政策』成田節男訳, 東洋書館。
- 呂 俊彪. 2014. 『京族人的族群認同与国家認同』北京：社会科学文献出版社。

- Adriano di St. Thecla. 2002. *Opusculum de Sectis apud Sinenses et Tunkinenses, A Small Treatise on the Sects among the Chinese and Tonkinese: A Study of Religion in China and North Vietnam in the Eighteenth Century*. Ithaca: Southeast Asia Program Publications, Southeast Asia Program, Cornell University.
- Đặng Cảnh Khanh and Tống Khắc Hải. 2001. *Địa chí Quảng Ninh*. Tập 3. Hà Nội: Nhà Xuất Bản Thế Giới.
- Dang, Nghiem Van, Chu Thai Son and Luu Hung. 2000. *Ethnic Minorities in Vietnam*. Hanoi: The Gioi Publishers.
- Fox, Richard G. 1985. *Lions of the Punjab: Culture in the Making*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
- Hutton, Christopher. 2000. Cross-Border Categories: Ethnic Chinese and the Sino-Vietnamese Border at Mong Cai. In Grant Evans *et al.* eds., *Where China Meets Southeast Asia: Social and Cultural Change in the Border Regions*. Singapore: ISEAS, pp. 254-276.
- Thomas, Joe. 2000. *Ethnocide: A Cultural Narrative of Refugee Detention in Hong Kong*. Aldershot: Ashgate.
- Tran Duc Lai ed. 2013. *The Nung Ethnic and Autonomous Territory of Hai Ninh-Vietnam*. Taipei: May King Enterprise.
- Trần Hồng Liên. 2008. Các nhóm cộng đồng người Hoa ở tỉnh Đồng Nai—Việt Nam. *Việt Nam học Kỷ yếu hội thảo quốc tế Việt Nam học lần thứ 3, Việt Nam: Hội nhập và phát triển*, Hà Nội 5-7.12.2008, Tập 3. Hà Nội: Nhà xuất bản Đại học Quốc gia Hà Nội, pp. 424-436.
- Ung, Charlene Lin. 2015. *Nam Moi: A Young Girl's Story of Her Family's Escape from Vietnam*. Charleston, SC: CreateSpace Publishers.
- Ủy ban Khoa học xã hội Việt Nam. 1978. *Tuyển tập văn bia Hà Nội*, Quyển 2. Hà Nội: Nhà xuất bản Khoa học xã hội.